

喉頭結核症例の検討

岩橋利彦^{1,2)} 望月隆一^{1,2)} 山下麻紀^{1,2)} 牟田弘²⁾

1) 大阪回生病院 耳鼻咽喉科

2) 大阪回生病院 大阪ボイスセンター

本邦の結核患者数は1999年以降、減少傾向にある。1年間の新規登録患者数は約23000人であるが、その中で喉頭結核の患者は約50人で全体の0.2%程度にすぎない。そのため、患者数の減少に伴う医療従事者の意識の低下が懸念される。また、喉頭結核は多様な病型により診断に苦慮する症例も多い。今回、我々が経験した3症例と過去の喉頭結核に関する報告を比較照合し、病型の変化や診療の注意点について検討したため報告する。

症例は57歳、22歳、48歳の女性であった。症例1は肉芽腫の診断で前医より当科紹介となった。全身麻酔下生検、喀痰検査により喉頭結核と診断された。症例2、3は喉頭炎の診断で前医より当科紹介となった。胸部CT、喀痰検査により喉頭結核・肺結核と診断された。

喉頭結核は医療の進歩や検査機器の普及により初期に発見される軽症患者が増加しており、逆に診断を難しくしている可能性があった。耳鼻咽喉科医は軽症患者の受診を想定し、経過の長い難治例は速やかに喉頭結核を疑う必要があると思われた。病型では新たに“腫脹型”という概念が必要と考えられた。病型の変化を把握し、遅れがちな検査を再確認することが早期診断の一助になると考えられた。